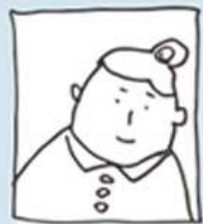


「ピカソ」になりきってみる



「ピカソ」になるには...



1 自分や友だちを紙に線だけでかいてみよう。



2 マーカーやクレヨン、絵の具などで、びっくりする色にぬってみよう。



3 うまくかこうと思わないで、へたっぴでいいよ！

ピカソの色を調べてみよう！



20世紀になると、本物そっくりではなく、色や形を自由に使うのが画家たちがあられる。

みんなはピカソを知っているよね。ピカソは色の暗い「青の時代」、明るい「ばら色の時代」を経て、強い原色を使った「キュビズム」(立体)の絵画をつくりだした。

ピカソは、どうしてはげしい色でかいたのだろう。それは、色でそれまでの絵を破壊しようとしたんだ。



《生活》1903年
自分の貧しい生活と社会の中の弱い人々をかきあわせて、貧しさの中でも失われない悲しみや辛い心をあらわした。



《玉乗りの少女》1905年
ピカソに恋人ができて心が落ちつき、色はピンク(赤系)が主流になった。



《本をよむ女たち、2人の人物》1934年
ピカソは強いビビッドな色だけでなく、わざときたない色を使ったりした。これもアートとしての挑戦だった。

Picasso administration © Gagosian - Succession Pablo Picasso - SPOA(JAPAN)



写真を使って、「ピカソな絵」をかいてみよう！

雑誌の人物写真を使い、明るいところと暗いところをとりだして、はげしい色で色わけしてみよう！

